公共建築にコスト意識を持ち込む

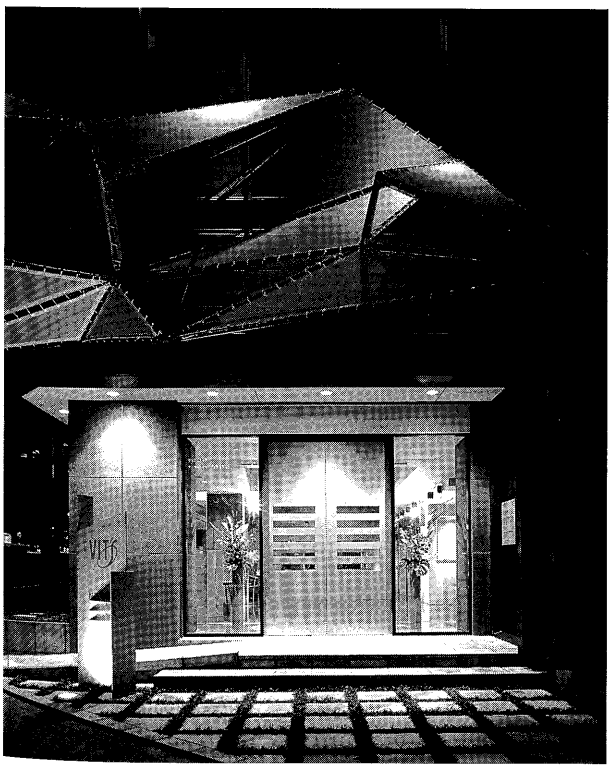
■ 榎本　文夫氏（インテリアデザイナー）との議論から

建築家とインテリアデザイナー

インテリアデザイナーは大別して、住居のデザインを扱うハウジング系と店舗などのデザインを扱う商業施設系があり、私は後者。両方にまたがって仕事をしている人はあまりおらず、デザイナーの世界も専門化されている。

建築家の中にも建築からインテリアまで幅広くこなしている人もいるが、そういう人のインテリアデザインと私のようなもっぱらインテリアデザインを専門にしているデザイナーのデザインの何が違うのかを考えると、ひとつには視点の違いがある。建築家の場合はデザインの手順として、与えられた敷地の中に法規に基づいて建築本体から考えていくため、視線は俯瞰的なものにならざるを得ない。構造的な問題やデザインの意識があって、順序としては最初に建築があって、それから内部の空間に向かっていく。それに対してインテリアデザイナーは内部空間を扱うのが専門であるので、視線が人の目線の位置にあり、等身大のところからスタートすることになる。

離れたところから見れば全体を大きく見ることができるが、逆に見えないものが出てくる。インテリアデザイナーの場合、見える範囲は小さくなるが、細かいところまで見える。その違いは、空間のスケール感の把握の仕方だとか、素材、ディテールのデザインなどの面に現れてくる。



NTT西新宿営業所窓口
（1990年）
浅川　敏氏撮影

民間建築のコスト意識

商業施設をデザインしている立場から見て公共施設と商業施設が決定的に異なっている点は、商業施設は利益を生まなければならないということ。したがって商業施設の場合利益を生まないデザインは結局よくないデザインということになる。利用者が気持ちよく入って、物を買ってもらったり、体験してもらうことが利益につながる。

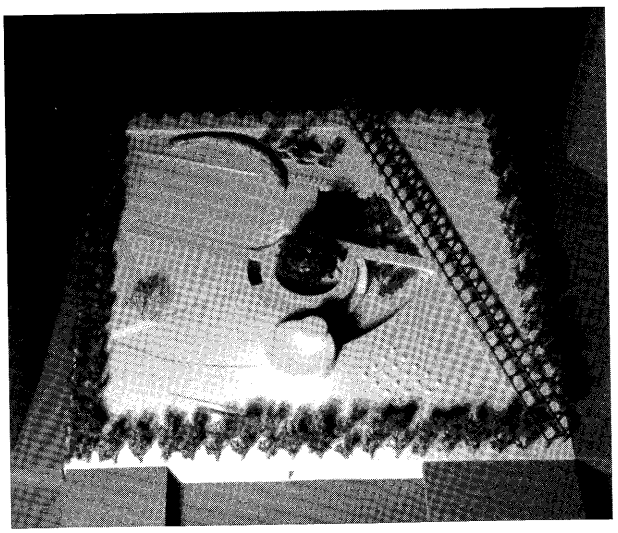
最近、文化施設も予算もかなりかけられ、立派になってきているが、実際建物の中に入ってみると、たとえばエントランスホールなど大理石を張ったりして豪華に見えるが、利用者の目線から見ると不親切な部分が多いし、費用のかけ方にしても本当に利用者にとって必要なところに必要なお金がかけられていないなど、バランスを欠いている部分が見られる。

そういう視点から見ると、公共建築の場合、民間建築と比較して効率が悪い部分もある。

フリートーク

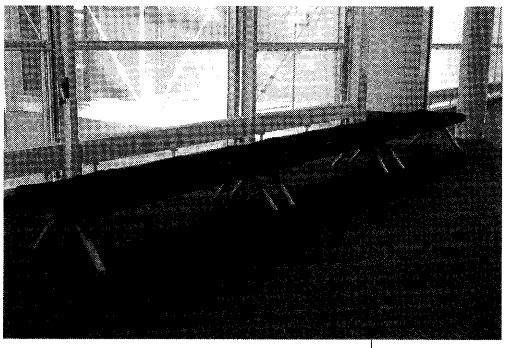
行政がインテリアデザイナーと出会う機会というのはほとんどありません。建築の場合、指名参加願いという制度がありますが、インテリアデザイナーの場合はどうなのでしょうか。

インテリアデザインを我々インテリアデザイナーに発注しようという発想が公共団体になく、指名願いの登録資格の問題などでもしようがないわけです。し



さいたま新都心「さいたまひろば」企画提案競技（1994年）

たがって、もし公共の仕事を受けるとしたら、現状としては建築家で登録のできるところと組む以外にありません。



（株）PLUSロビーチェア（岩出山町立岩出山統合中学校）（1996年）

私たちの身の回りの小さなもの――公園のベンチであったり、歩道橋の手すりだったり――が、本来いちばん大切だと思うのですが、制度がないのでやりようがないわけです。

建物やオフィスの改修などは、インテリアデザイナーに依頼すればデザインしていただけるでしょうか。

人によって特定のものしかやらないという場合もありますが、基本的にはほとんどのものに対応できます。

インテリアデザイナーは日本に何人いるのでしょうか。

おそらく何万人単位でいると思います。ただ、フリーのインテリアデザイナーとなるとごく少数で、大半はインハウスのデザイナーです。また、デザインのレベルにも相当の開きがあります。

●榎本文夫
1957年　東京生まれ
1979年　東京造形大学造形学部デザイン学科卒業
1980年　クラマタデザイン事務所入所
1986年　榎本文夫アトリエ設立
1992年　東京造形大学非常勤講師
現在　　東京ＹＭＣＡデザイン研究所非常勤講師

●主な作品
「イッセイミヤケ」ショップデザイン（1986年）
「カフェ『アミエル』＆レストラン『フリスコ』」（1989年）
「ＮＴＴ西新宿『ＶＩＴ’Ｓ』」（1990年）
「ＮＴＴ臨海副都心有明ビル基本デザイン」（1990年）
「トヨタオートサロン『ＡＭＬＵＸ』大阪」（1993年）
「骨董品店『井上・オリエンタルアート』」（1994年）
「さいたまひろば」企画提案協議2等入選（1994年）